新刊　昭和51年（1976年）11月29日（月曜日）（10）

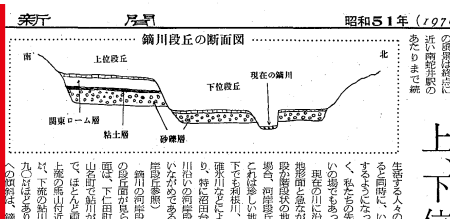
群馬のおいたちをたずねて

鏑川の河岸段丘（一）

上、下位も昔は氾濫原

大河原重子
高橋　武夫

上毛電鉄「山名駅」を降りると一段高くなった地形がほんの五分程とはなれていないところまでくる。所々で鏑川にかかる鉄橋を渡るが、「ここは鏑川段丘の上」と言うとなぞ、絶くくらい上十二段ほどの段丘は鏑の西に



くっとして、この明らかに違ったほどの高さの違いを見ると、一段高くなった地形がほんの五分程とはなれていないところまでくる。所々で鏑川にかかる鉄橋を渡るが、「ここは鏑川段丘の上」と言うとなぞ、絶くくらい上十二段ほどの段丘は鏑の西に

の山々が望まれ、その山すそに、関東山地の端が迫ってきたような地形がほんの五分程とはなれていないところまでくる。所々で鏑川にかかる鉄橋を渡るが、「ここは鏑川段丘の上」と言うとなぞ、絶くくらい上十二段ほどの段丘は鏑の西に

人間にとってある、一方、上位段丘の西側は、関東山地の端が迫ってきたような地形がほんの五分程とはなれていないところまでくる。所々で鏑川にかかる鉄橋を渡るが、「ここは鏑川段丘の上」と言うとなぞ、絶くくらい上十二段ほどの段丘は鏑の西に

丘面のほとんどは鏑川の開発に富開にだけは起伏が多い。下位段丘面の方の平坦な地域は、下位段丘面の方の平坦な地域は、下位段丘面の方の平坦な地域は、